



# はぴはぴレッスン

だって先生はキミのフィアンセなんだもん

橘 真児

illustration © 神無月ねむ

美少女文庫  
FRANCE FASHION

## 始業前　くさびしい少年

「ごめんね、智ちゃん<sup>とも</sup>。ママ、あなたが大きくなるまで側にいてあげたかったのに、もうこれでサヨナラしなくちゃいけないみたい」

病院のベッドで、いまわの際の母親からそう言われ、佐藤<sup>さとう</sup>智也<sup>ともや</sup>はボロボロと涙をこぼした。

「そんなのヤダよ……ママ、はやくげんきになってよお」

「智ちゃんは男の子でしょ。ママがいなくなっても泣いちゃダメよ」

だが、智也は小学校にあがったばかりだ。母との永遠の別れに涙を抑えられるほど、大人ではない。

「それから、パパのことをよろしくね。これからは智ちゃんが、パパの面倒をしつかりみてあげなきゃいけないのよ」

夫に子供のことを託すのならわかるのだが、これではあべこべではないか。変だな  
と思ったものの、そのときは悲しみのほうが大きすぎた。

「わかったよ、ママ。だから死なないで。ほく、もっとママといっしょにいたいよ。  
もうオモチャかってとかワガママいわないし、おてつだいもたくさんするから」

切々と訴えると、母親は小さくほほ笑んだ。

「ごめんね——」

それで事切れた。

「ご臨終です」

りんじゆう

医師の言葉に、一緒にいた父の眞蔵しんぞうは智也を押し退け、妻の遺体にすがりついて号  
泣した。

大人の男が声をあげて泣くのを初めて目にした智也は、それですますます涙が溢れた。  
けれど、母に泣いちゃいけないと言われたこともあつて唇を噛みしめ、声だけはあげ  
るまいと必死で堪えた。

こうして、父と子の、ふたりきりの生活がはじまった。

商社勤めの、ごく普通のサラリーマンであった眞蔵は、妻を亡くしてからひとが変  
わったようになった。仕事からの帰りがめつきり遅くなったばかりか、休日にも息子  
をひとり残し、たびたび家を空ける。無精髭ぶしやうひげも伸び、身なりも気にしない。何日も帰

ってこないということが増えていった。

（ママが死んじやったから、パパはきつと寂しいんだ……）

だから憑かれたように仕事に没頭しているのだろう。

子供ながらにそう理解し、ここは自分にできることは、なんでもやってあげなくちゃいけないんだと、智也は決意した。

以来、幼いながら家事はすべてこなし、父親を支えるべく頑張った。ひとりであるときも決して寂しがったりせず、ただ父の帰りをじっと待ちつづけた。

そうやって息子が全面的に協力してくれるのを受け、眞蔵はますます家にいる時間が少なくなった。

眞蔵が商社をとくに辞めていたことを智也が知ったのは、中学に入ってからであった。

預かっていた通帳の残高が心もとなくなり、光熱費も落とせなくなるかもしれない。そのことを、久しぶりに帰ってきた父親に告げたところ、

「金はない」

あっさりと答えた彼から、仕事をまったくしていなかったことを打ち明けられたのだ。なんでも亡き妻にかけられていた生命保険がかなりの額で、そのお金を使って自由気ままに世界のあちこちを飛びまわっていたという。

「どういふことなんだよ！」

これまで父親のためにと、母の遺志を継いで奮闘してきた自分はなんなのか。温厚な智也もさすがに激怒した。

「いい大人のくせに、もうちょっと家長としての自覚を持てよ。だいたい——」

「ああ、そうだ。お前に見せるものがあつたんだ」

説教しようとする息子を制して、眞藏が渡したものは、母からの手紙であつた。

『智ちゃんへ——』

これを読んでいるということは、ママはもうこの世にいないのですね』

その書きだしに、胸がジンと熱くなった。こんなものを書き残していたのかと、母親の愛情に涙がこぼれかける。しかし、次のくだりで愕然となった。

『パパは、糸の切れた風船みたいなひとです。いえ、舵かじの利きがなくなつた宇宙ロケットみたいなひとです。ママはそんなパパを一生懸命抑えていましたが、もう無理みたいです』

死の間に、パパの面倒をしっかりと見てと言つた理由がようやくわかつた。自由奔放でなにをするかわからない夫相手に、彼女もかなり苦勞をしていたようである。それこそ、きちんと会社勤めをさせるだけでも、並み大抵のことではなかつたのだろう。『ママ、もう疲れちゃつた。だから、あとは智ちゃんが頑張つてね』

手紙の最後はそう結ばれており、智也は思わず「無責任だろ、それ!!」と叫んだ。おかげで、涙もすっかり引っこんでしまった。

「お前が一人前になったら渡すようにと、ママに言われていたんだ。父親に説教するようになったんだから、お前ももう充分に大人だ。これで私も、安心して家を任せられる」

これまでも任せつきりだったじゃないかと、勝手なことを言う父親にも啞然とする。生命保険はこうなることを見越して母親がかけていたらしいが、それをほとんど使ってしまうとは。なんの危機感もないのかと、怒りを通り越して脱力してしまった。

「ていうか、金がないってのに、これからどうするんだよ?」

「心配するな、なんとかなる」

そうしてまた何日も留守にした眞蔵は、目の玉が飛びだすほどの金額が入金された通帳を持って帰ってきた。

「ど、どうしたんだよ、これ!」

「だてに商社に勤めていたわけではない。先物取引とか為替かわせのアレとか、いろいろだ」  
いちおうお金を稼ぐノウハウは身につけているということか。

「これで当分はだいじょうぶだろう。では、私は出かけてくる」

「出かけるって、どこへ?」

「キリマンジャロだ」

そこに登ってコロンビアのコーヒーを飲みたいのだとわけのわからないことを言い残して、眞蔵は旅立った。

あんな親父に頼っていたら、佐藤家は減びる！――

智也は確信し、以来、それまで以上に家計の管理と、節約第一の家事に邁進する（まいしん）ことにした。

収入が不安定だから、なにがあっても困らないように貯蓄をしっかりとする。食費光熱費、その他諸々の費用も儉約する。

取れるときには取れるだけ、父親から金を<sup>むし</sup>雀った。どうせ彼は、ロクなことに使わないのだ。そうして積み立てたものを、学費や進学費用に充てた。

（おれはしっかりと勉強して、立派な大人になるんだからな。いい大学に入っていいい会社に入って、綺麗なお嫁さんをもらって幸せに暮らすんだ）

実の父を反面教師に、学生としても家を預かる主夫としても、懸命に努力した。

その甲斐<sup>かい</sup>あって、佐藤家は借金取りに追われることも自己破産することもなく、これまでやってこられたのである。食料が枯渇し、ゴキブリすらいなくなるほどの危機的状况も一度や二度ではなかったが、それもすべて乗り越えた。

大黒柱のはずの眞蔵は、年に数回ぐらいしか家に帰ってこない。おまけに連絡もな

かなか取れなかったから、佐藤家の真の柱は智也であると言ってもいいだろう。まあ、職業欄に自由業ではなく「自由人」と記入するような困ったちゃんなど、いないほうがよっぽどマシだった。

そうして智也も、いよいよ高校三年生。ちよつと無理して私立の進学校に入ったこともあり、ここはぜひとも現役で一流大学に合格せねばと、闘志と信念を燃やす。

（この一年が勝負だからな——）

その矢先に、まさかあのような事態が巻き起ころうとは、いったい誰が予想したであらう。すべては彼の父、佐藤真蔵が招いたことであつた。